

聴覚障がい学生に対する支援者養成に関する実践的研究

枝廣 和憲¹⁾
(2015年12月22日受理)

Practical Study on the Support for Students with Hearing Impairment

Kazunori EDAHIRO

This paper is practical study on the support for students with hearing impairment. The method of the main support for students with hearing impairment is note-take. In the present study, the note-takers was observed. They completed a questionnaire about Social Interest and skills of note-take. The results indicated that Social Interest change was not seen. Note-takers performed significantly higher on some factors in skills of note-take. The results from a qualitative analysis indicated that they grew mentally. For example, they have noticed the importance of trusting one's partner, and have noticed importance of communication with their partner and students with hearing impairment.

Key words: Student with Auditory Disorder, Note-Take with PC, Training of Supporter, Convention on the Rights of Persons with Disabilities

キーワード：聴覚障がい学生，パソコンノートテイク，支援者養成，障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律

はじめに

障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（平成25年法律第65号）（以下、障害者差別解消法と略記）が、平成28年度4月より施行される。それに伴い、国立大学法人の高等教育機関は、合理的配慮（Reasonable accommodation）が「義務」および私立の高等教育機関においては「努力義務」とされる。これにより、一般の高等教育機関、すなわちいわゆる健聴学生と同等の環境で修学する聴覚障がい学生は今後増加すると推察される。

高等教育機関において、聴覚障がい学生は、一部の障がい等を持つ学生のための高等教育機関を除き、一般高等教育機関においての人数は非常に少ない。白澤（2007）によると、聴覚障がい学生が在籍している大学・短期大学は、8割が1～3名という現状であった。しかしながら、障害者差別解消法に伴い、増加傾向にあり、また受け入れ高等教育機関においても支援が「義務（国立大学法人）」もしくは「努力義務（私立高等教育機関）」とされているため、喫緊の課題といえる。

そこで、本稿では、今後増加するであろう、聴覚障がい学生の受け入れ体制の整備にあたり、多くの大学で用いられている支援方法である「ノートテイク」に着目し、その支援者養成の観点から、実践から得られた知見を明らかにしたい。

ところで、「ノートテイク」とは、「聴覚障害学生に、授業の内容や教室の様子を、リアルタイムで文字に変えて伝える方法」（中津，2006）であり、手書きで用紙に筆記する「手書きノートテイク」とパソコンで文字入力する「パソコンノートテイク」とに大別することができる。また、ノートテイクをする人を「ノートテイクカー」または「テイクカー」という（水内，2009）。また、パソコンによるノートテイクを行う支援者を「パソコンテイクカー」という。「手書きノートテイク」と「パソコンノートテイク」の違いとして、「手書きノートテイク」の場合、「パソコンノートテイク」と比較して、情報量の多さにメリットがある。おおよそ、「手書きノートテイク」が、話すスピードが300文字／分程度に対して、手書きのスピードは60文字／分程度である。しかし、「パソコンノートテイク」の場合は、

1) 岡山大学学生支援センター

話すスピードが 300 文字／分程度に対して、タイピングのスピードは 150 文字～ 200 文字と圧倒的に情報量が多い（アクセシビリティ育成協議会，2015）。ただし、「パソコンノートテイク」の場合、支援者にタイピングスキルが求められたり、また図表や数式などの工夫が難しいなどのデメリットも存在する。



Figure 1 ノートテイクのイメージ
出典：（アクセシビリティ育成協議会，2015）



Figure 2 ノートテイク養成講座の様子

方法

1) 調査対象

A 県の国立大学法人 A 大学 65 名のうち、回答に不備のなかった 60 名を分析の対象とした。60 名の内訳は、男子 21 名、女子 39 名、年齢 18～24 歳、平均 20.61 歳 (SD : 1.41) であった。

2) 調査手続き

本研究の期間は、2015 年 10 月～11 月であった。回答は無記名自記式で、回収は守秘義務に厳守して行った。

3) 質問紙

(1) フェイスシート

性別・年齢・ノートテイク歴（通算回数）等を尋ねた。

(2) 共同体感覚に関する質問項目

大学生の共同体感覚を測定するため、高坂（2011）の「共同体感覚尺度」を用いた。この尺度は、信頼性・妥当性ともに十分に検討されている。また、この尺度は 3 因子 22 項目で構成されている。

第 1 因子は、「自分が今いるグループや集団の人たちを信頼することができる」「周囲の人との活動に積極的に参加している」など、現在所属している集団やその成員を信頼できている感覚、または信頼できる集団に所属できている感覚である項目（所属感・信頼感因子）、第 2 因子は、「自分には何かしら誇れるものがある」「今の自分を大切にしている」など、現在の自分自身を肯定的に受け入れていることができる感覚を表している項目（自己受容因子）、第 3 因子は、「進んで人の役に立つことをすることができる」「人のためになることを積極的にすることができる」など、人に対して主体的に貢献することができる感覚を表している項目（貢献感因子）により構成されている。なお、回答形式は、「5 とてもあてはまる」から「1 まったくあてはまらない」までの 5 件法を用いた。

(3) ノートテイクスキルに関する質問項目

吉川・大田・広田・白澤（2001）の『聴覚障害学生をサポートする大学ノートテイク入門』の記述を参考に作成したノートテイクの技術的側面に関する 7 項目を用いた。内容は、「丁寧な字を早く書ける」「パソコンのキーボードを見ずにタイピングできる」「板書をノートに早く書きうつすことができる」「微分・積分などの数式を書くことができる」「パソコンのプログラミングができる」「パソコンのタイピングを早くできる」「誰かと連携してパソコン入力をするこ

きる」であった。なお、回答形式は「7かなり得意」から「1かなり苦手」までの7件法を用いた。

(4) ノートテイクに関する質問項目（自由記述）

ノートテイクをしようとした動機などを自由記述で求めた。具体的には、「ノートテイクに応募しようと思った理由について詳しく書いてください。」「ノートテイクに必要なスキルはなにがあると思いますか。思いつくことを自由にお書きください。」「連携入力をうまくするには、どんなことが必要だと思いますか。思いつくことを自由にお書きください。」「ノートテイク活動を通して成長したと感じることを具体的にお書きください。」「今後、ノートテイクに関して、企画をしてほしいものがあれば、お書きください。」であった。

結果

1) ノートテイク歴（通算回数）による、経験なし群、低群および高群の抽出

共同体感覚尺度の得点およびノートテイクスキルに関する質問項目の得点を分析するにあたり、ノートテイク歴（通算回数）の多い学生（高群）とノートテイク歴（通算回数）の少ない学生（低群）を抽出するため、ノートテイク歴（通算回数）の平均値（20.47）を基準に群分けを行った。その結果、高群（ノートテイク歴（通算回数）平均 = 22.88, $SD = 18.81$, $n = 17$ ）と低群（ノートテイク歴（通算回数）平均 = 18.52, $SD = 12.76$, $n = 21$ ）が抽出された。なお、ノートテイク歴（通算回数）が0の学生は、経験なし群（ $n = 22$ ）とした。

2) ノートテイク歴（通算回数）による共同体感覚尺度の得点の比較

ノートテイク歴（通算回数）による共同体感覚尺度子、自己受容因子、貢献感因子）に対して、3水準（高群・低群・経験なし群）の一要因分散分析を行った。その

Table 1 共同体感覚の各因子得点と分散分析の結果

	経験なし	低群	高群	群間差
所属感・信頼感	3.90 (.74)	3.69 (.13)	3.81 (.12)	n. s.
自己受容	3.58 (.66)	3.23 (.83)	3.65 (.80)	n. s.
貢献感	3.80 (.63)	3.62 (.56)	3.67 (.67)	n. s.

下段：標準偏差

結果、すべての因子に有意な群間差が認められなかった（Table1）。

3) ノートテイク歴（通算回数）によるノートテイクスキル得点の比較

ノートテイク歴（通算回数）によるノートテイクスキル得点の比較を行うため、それぞれの項目に対して、3水準（高群・低群・経験なし群）の一要因分散分析を行った。その結果、「パソコンのキーボードを見ずにタイピングできる」($F(2,57) = 4.99, P < .01$)「板書をノートに早く書きうつすことができる」($F(2,57) = 14.88, P < .001$)「パソコンのプログラミングができる」($F(2,57) = 3.56, P < .05$)「パソコンのタイピングを早くできる」($F(2,57) = 2.90, P < .10$)「誰かと連携してパソコン入力を行うことができる」($F(2,57) = 10.46, P < .001$)に有意な群間差がみられた。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、「パソコンのキーボードを見ずにタイピングできる」については、高群 > 経験なし群、「板書をノートに早く書きうつすことができる」については、高群 > 低群 > 経験なし群、「パソコンのプログラミングができる」については、高群 > 経験なし群、「パソコンのタイピングを早くできる」については、高群 > 経験なし群、「誰かと連携してパソコン入力を行うことができる」については、高群 > 低群 > 経験なし群であった。その他の項目に関しては、有意な群間差がみられなかった。

4) ノートテイクに関する質問項目（自由記述）

(1) 「ノートテイクに応募しようと思った理由について詳しく書いてください。」

この項目については、第一に、「もともと障害者支援のボランティア活動をしており、大学内でもボランティア活動できると知ったから」、「人のために役に立つことは日常生活で何気なくできているとは思いますが、障がいを持った人に手助けする機会があまり無かったため」など、障がいに関連するボランティアをしたいという動機が多く見られた。

第二に、「ブラインドタッチの能力を生かせると思ったから」、「タイピングに自信があった」や「タイピングがある程度得意で、何か役立てられることがあるなら活かしたいと思ったから」など、自身のパソコンスキルやタイピングスキルを活かしたいという動機も多く見られた。

第三に、「余った時間で誰かのために動きたかった」「学校生活にも慣れ授業にも余裕ができたため、何か新しいことをしてみようと思ったから」、「学業・課外活動に影響が出ない程度の仕事を探していたから」な

どの学業との両立ができるという動機も多く見られた。そのほかには、「自身や友人、家族などに障がいを持っている」など学生自身の身近に障がいに関する動機があったものもあった。

(2)「ノートテイクに必要なスキルはなにがあると思いますか。思いつくことを自由にお書きください。」

この項目については、第一に「情報を聞き取ってすばやく、そして分かりやすく要約できる力」、「先生の話の聞きとる能力」や「先生の言葉を一語一句完璧にとろうとするのではなく、よくある言い回しは語尾を省略する」など、要約力に関するものが多くみられた。

第二に、「タイピングの速さ」、「タイプミスのお少なさ」、「タイピングの正確さ」など、パソコンスキルに関するものが多く見られた。

第三に、「相手の気持ちを考えられる」、「パートナーの意思を読み取る能力」や「3人のコミュニケーション」など、パソコンノートテイク者同士あるいは、聴覚障がい学生も含めて、お互いの連携する力に関するものが多く見られた。

第四に、「講義内容の分野を少しでも知っておくこと」、「講義へのある程度の予備知識」など、専門知識の事前把握力に関するものが多く見られた。

(3)「連携入力をうまくするには、どんなことが必要だと思いますか。思いつくことを自由にお書きください。」

この項目については、第一に「相手がタイピングできる限界の量を予測して、積極的に入力していく」、「ペアの人が打っている次のフレーズとつながるように文章の終わり方を考えること、ペアの人の打つ量を知ること」、「どちらかが一方的に進めるのではなく、相手がどうしたいのかを、入力時にできる限り読み取ることで、ミスをなくすことが必要」など、連携に必要な入力に必要なパソコンスキルに関するものが多く見られた。

第二に、「パートナー同士で、必要なコミュニケーションを取ること、信頼関係を作ること」、「事前に相手と少し話をする」、「相手を気遣えること」、「事前に打ち合わせをして、どのタイミングでそれぞれが打ち始めるのかを決めること」など、連携入力を行うパートナーのパソコンノートテイク者との信頼関係に関するものが多く見られた。

(4)「ノートテイク活動を通して成長したと感じることを具体的にお書きください。」

「人脈が広がった」

「タイピングの速度は少し上がった」

「聴覚障害についてちょっと知ることができた」

「話を聞き、重要なところがどこかを考えるくせがついた」

「ノートテイクを通して様々な方に出会うことができ、初対面の人と仕事をするときのノウハウが学べた」

「何かあったとき、ある程度落ち着いて対処できるようになった」

「以前より相手の状況・望んでいることを意識できるようになった」

「聴覚障がいへの理解が深まった」

「福祉関連の話題に敏感になるようになった」

など、多種多様なものがみられた。

(5)「今後、ノートテイクに関して、企画をしてほしいものがあれば、お書きください。」

「テイク者や障がい学生、障がい学生支援室のスタッフの人たちで集まって、遊んだりご飯を食べたりできると楽しいのではないかと思う」

「iptalk の詳しい使い方が知りたい」

「ノートテイク活動全体としてうれしいこと・困っていることなどのフィードバックがあればより良い活動になると思う」

「スキルアップにつながるような技術を教え合う交流会が必要であると思う」

「資格」を取得する制度が欲しい」

「ブラインドタッチを練習する機会がほしい」

などがみられた。

考察

1) ノートテイク歴（通算回数）による共同体感覚尺度の得点の比較

本研究の結果では、ノートテイク歴（通算回数）による共同体感覚尺度の得点に、高群、低群、経験なし群の有意な群間差はみられなかった。他者に対する信頼感や貢献感に関しては、後述する自由記述の結果から、群間差（高群>低群>経験なし群）がみられると予想されたが、有意な群間差が見られなかった理由を鑑みると、第一にサンプル数の少なさの影響は無視できない。今後、他大学との協力も得て、大規模な調査を行う必要が考えられる。第二に、本研究では被験者間での分散分析を行ったが、本質的にノートテイク者の成長をとらえるためには、縦断的なアプローチが必要となるだろう。

2) ノートテイク歴（通算回数）によるノートテイクスキル得点の比較

本研究の結果では、「パソコンのキーボードを見ずにタイピングできる」「板書をノートに早く書きうつ

すことができる」「パソコンのプログラミングができる」「パソコンのタイピングを早くできる」「誰かと連携してパソコン入力をする事ができる」に有意な群間差がみられ、多重比較を行ったところ、「パソコンのキーボードを見ずにタイピングができる」については、高群>経験なし群、「板書をノートに早く書きうつすことができる」については、高群>低群>経験なし群、「パソコンのプログラミングができる」については、高群>経験なし群、「パソコンのタイピングを早くできる」については、高群>経験なし群、「誰かと連携してパソコン入力をする事ができる」については、高群>低群>経験なし群であった。

これら有意な群間差のあった項目をみると、パソコンスキルに関するものが多い。A大学では、「パソコンノートテイク」を主たるノートテイクの方法として、研修等を行っており、「手書きノートテイク」は数式や図表、実験棟における補助的なものとして行っていることが背景にあると考えられる。いずれにせよ、「パソコンノートテイク」の経験を積み重ねることにより、これに関する自信が向上したものと推察できる。

3) ノートテイクに関する質問項目 (自由記述)

(1) 「ノートテイク者に応募しようと思った理由について詳しく書いてください。」

本研究の結果では、「障がいにかかわるボランティアをしたい」という回答が多く見られた。冒頭で述べたとおり、障害者差別解消法が平成28年度より施行されることに伴い、高等教育機関において、障がい学生のみならず、支援者側の意識の高まりも予想される。

また、「自身のパソコンスキルやタイピングスキルを活かしたい」という理由も多かったことから、パソコンノートテイクに関して、ノートテイク者募集の際にそのパソコンスキルを活かせるような広報の工夫も必要だと考えられる。

さらに、「学業との両立ができる」という回答も多くみられ、いわゆる学外のアルバイトや課外活動とは異なり、学生の本務である学業に支障のない範囲でできる活動としては、高等教育機関として有意な活動と推察できる。

(2) 「ノートテイクに必要なスキルはなにがあるとしますか。思いつくことを自由にお書きください。」

本研究の結果では、①要約能力、②パソコンスキル、③コミュニケーション能力、④専門知識の事前把握に大別された。①要約能力および②パソコンスキルについては、研修会などの機会を増やすことで補うことができると考えられる。また、③コミュニケーション能

力については、後述のノートテイク者同士や聴覚障がい学生との交流会等を企画していくことが重要であると考えられる。④専門知識の事前把握については、喫緊の課題であるといってもよい。聴覚障がい学生の学年が上がるにつれ、専門的知識の必要な授業も増えていき、当該聴覚障がい学生と同じ学部の上級生でなければ対応できない場合が今後予想される。しかしながら、支援者側も上級生になるにつれ、卒業研究や就職活動等が入り、なかなか確保できない現状がある。この点については、他大学の状況も踏まえて、検討していく必要があるだろう。

(3) 「連携入力をうまくするには、どんなことが必要だと思いますか。思いつくことを自由にお書きください。」

本研究の結果では、①パソコンノートテイクの連携入力スキルに関するもの、②パソコンノートテイクの連携パートナーとの信頼関係の構築に大別された。

①のパソコンノートテイクの連携入力スキルに関するものについては、パソコンノートテイクの連携入力スキルに関する研修会をより充実させていくことが望まれる。②のパソコンノートテイクのパートナーとの信頼関係については、事前に打ち合わせをしておくことについては、研修会等で指示はしているが、実際はノートテイク者に任せている部分が多いため、日ごろから顔を合わせるような交流会のような企画が必要となってくるであろう。

(4) 「ノートテイク活動を通して成長したと感じることを具体的に書きください。」

本研究の結果では、多種多様なものがあがってきた。ノートテイク活動が単に障がい者支援にとどまるだけでなく、他者への思いやりや、自己の内面の成長等にも影響していることが推察された。この部分については、本研究の共同体感覚尺度では測れなかった側面があることを示唆しており、他の尺度の検討の余地がある。

(5) 「今後、ノートテイクに関して、企画をしてほしいものがあれば、書きください。」

本研究の結果では、やはり交流する機会を望む声が多くみられた。障がい学生支援室として、こうした声に耳を傾け、単にスキルアップを目指した講座だけでなく、前述したパートナーとの信頼関係などを構築するためにも、交流会などの企画を実施していくことが必要となるであろう。

また、資格については、次年度より、アクセシビリティリーダー育成協議会認定の資格を取得することができるように整備を進めている段階であり、これらのことも広報の工夫として活用できるであろう。

まとめと展望

障害者差別解消法の施行により、いわゆる一般の高等教育機関における聴覚障がい学生（聴覚障がい学生に限らないが）の増加が見込まれる。現状のノートテイクには限界があり、聴覚障がい学生との建設的対話を以て、合理的配慮を進めて行かなければならない。

ノートテイクの質的向上を図ることは当然であるが、聴覚障がい学生の声をできるかぎり取り入れることも重要である。

本研究の結果において、学生からの声があったように、聴覚障がい学生および障がい学生支援室スタッフ、支援者の交流の機会を持つことにより、必要十分な合理的配慮の提供を促すことができるものと考えられる。

文献

- アクセシビリティ育成協議会（2015）オンラインアクセシビリティ講座 2015
- 高坂康雅（2011）共同体感覚尺度の作成 教育心理学研究, 59, 88-89
- 水内豊和（2009）聴覚障害学生に対する学生支援のあり方に関する実践研究 富山大学人間発達科学部紀要, 4(1), 61-76
- 中津真美（2006）ICTを活用した初めての障害学生支援—障害学生支援コーディネータ育成FD研修会支援者の採用・登録から派遣まで：東京大学の例—
- 白澤麻弓（2007）聴覚障害学生支援の全国的状況② PEPNet-Japan TipSheet
- 吉川あゆみ・大田晴康・広田典子・白澤麻弓（2001）聴覚障害学生をサポートする大学ノートテイク入門 人間☆社出版.